「どう生きるか」カリキュラム開発に関する実践的考察

―８年生「社会に生きる」の実践に着目して―

A Practical Study on “How We Live” Curriculum Development

― Focusing on the Practice of 8th Grade Students “Living in Society”―

大坪雅詩[1]，大塚光朗[2]，髙橋亮[3]，浅井拓也[4]，長倉守[5]

OTSUBO Masashi[1], OTSUKA Mitsuro[2], TAKAHASHI Ryo[3],
ASAI Takuya[4], NAGAKURA Mamoru[5]

［キーワード Keyword］　「どう生きるか」，教育課程，研究開発，検討の経過

［所　　属 Institution］　[1,2,3,4]岐阜大学教育学部附属小中学校（Gifu University Faculty of Education Affiliated Compulsory School System （Elementary-Junior High），[5]岐阜大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education, Gifu University）

［要　　旨 Abstract］　本稿は、岐阜大学教育学部附属小中学校において開発を進める新領域「どう生きるか」のカリキュラム開発について、８年生「社会に生きる」を事例に開発の具体的かつ実践的状況を提示し、成果と今後の課題を明らかにすることを目的としている。令和５年度は実質的に研究開発の３年目を迎え、教育課程やカリキュラム開発の枠組み（全体構想）と具体的な実践を往還させながら、研究開発に進展が見られている。そこで、８年生のカリキュラム開発における全体構想との関連について、資質・能力や学びのカテゴリーに着目して言及した。その上で、８年１組と３組における学びの展開や研究発表会における学習指導案（本時：11月実施）を取り上げてカリキュラム開発に関する具体的状況を記述した。また、授業者や学年主任の立場からカリキュラム開発の状況について省察を加えた。本稿の整理を研究開発最終年度である令和６年度における検討に繋げていきたい。

1. はじめに

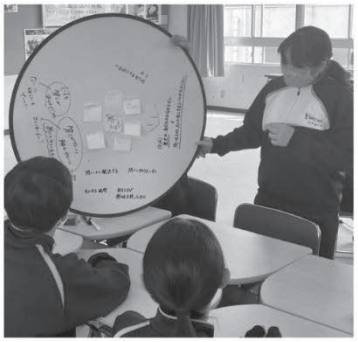
本稿の目的は、岐阜大学教育学部附属小中学校において開発を進める新領域「どう生きるか」のカリキュラム開発について、８年生「社会に生きる」を事例に開発の具体的かつ実践的状況を提示し、成果と今後の課題を明らかにすることである。本附属小中学校は、令和２年度に義務教育学校となったのを契機として、令和６年度にかけて文部科学省から研究開発学校の指定を受け、どう生きるかを中核とした教育課程の開発に取り組んでいる。どう生きるかは、従来の道徳科と総合的な学習の時間、生活科の時間を併せて授業時数を創出し、自己実現に向かう資質・能力の育成を目指す創造的な教育課程開発である。令和２年度はコロナ禍の影響によりパイロットプランの実施に留まったため、今年度は実質的に研究開発の３年目を迎え、教育課程やカリキュラム開発の枠組み（全体構想）と具体的な実践を往還させながら、研究開発に進展が見られている。そこで、本稿では８年生の取組を事例として、カリキュラム開発の具体的かつ実践的状況を示すとともに成果と今後の課題を整理し、研究開発最終年度である令和６年度における検討の足場としたい。

本稿の以下の内容構成については、まず２節では、８年生のカリキュラム開発における全体構想との関連について、資質・能力や学びのカテゴリーに着目して言及する。その上で３節と４節では、８年１組と３組における学びの展開や研究発表会における学習指導案（本時：11月実施）を取り上げてカリキュラム開発に関する具体的状況を記述する。また、授業者による省察に触れる。続く５節では、学年主任の立場からカリキュラム開発の状況について省察を加えることとする。

2. 全体構想との関連

2.1 育みたい資質・能力の設定

８年生では、７年生時までの探究とその歩みや実態をもとに、表１のように育みたい資質・能力を設定した。特に、本学年の生徒は７年生時に「ユニバーサルデザイン・ピクトグラム」「柳ケ瀬商店街のまちづく



- 実社会や実生活の中にある問題に対する問いを生み出し、その問いを解決するために何ができるか、様々な視点や立場から考え行動することができるようにする。（問題解決力）
- 仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、それぞれの願いや考えを踏まえた上で、他者と協働しながら納得解や最適解を導こうとすることができるようにする。（関係構築力）
- 自分や社会を見つめ直し、社会に生きる人々に敬意をもちながら、自分にできることを考え、他者と共に社会のために行動しようとする態度を養う。（貢献する人間性）

図１　育成を目指す生徒の姿

り」「外国人留学生との関わり」を通して、多様性について考えてきた。その際に大切にしてきたことは、自分の目で街や実物を目にすること。実際にその人に会い、自分の声で話し、耳を傾けて話を聞くこと。自分にできる事で貢献し、関わりをもつことである。８年生の段階においても、３つの資質・能力を育み、実社会や実生活にある問題に目を向けるだけでなく、多様な他者との関わりを大切にし、自分の問題として考え、活動や行動できるようにしたいと考えた。

2.2 学びのカテゴリー（探究領域）について

８・９年生の学びのカテゴリー（探究領域）は、図２に示す通り「社会に生きる」である。生徒は７年生までに、様々な問題と出会い、解決していく過程で、自分を取り巻く社会で生きる人々は、いろいろな見方や考え方もって生きていることを理解しながら学んできた。自分の得意なことや苦手なことが認識できるようになり、自分の将来のことも考える時期である。８年生では、これまで学んできたことを生かし、多様な価値観をもつ人が生きる社会で「自分はこれからどう生きていきたいのか？」を考え、自身の将来を見据える。将来を考える中で、自分に必要なものや磨くべきこと等を模索し、判断し、それらを確立させるために行動する姿を具現させたいと考えた。

２年間の探究を構想するにあたり、学級単位で実施する「どう生きるか」から個人の「問い」をベースにしたテーマ別グループ探究への移行に留意した。その際、生徒に基本的な探究方法が身に付くことを意図した構成を考えた。そのために前半は、学級ごとに探究テーマ、サブテーマ、探究の視点を設定した。これは、生徒がみんなで考えたいことは何か、なぜそれを考えたいのか、そのテーマにはどのように迫るのかを明確にするためである。そうすることで、生徒の探究がより具体的になり、発達段階位に即した調査活動、道徳的諸価値をもとに納得解や最適解を導き、乗り越える経験ができるようにカリキュラムを構成した。後半は、前半や過年度の経験を基に、個々に問いをもち、テーマ別グループを意図的に編成する。その中で、探究テーマ、サブテーマ、探究の視点を設定して、学んだことを活かし、個々の問いを活かしながら探究できるカリキュラムを編成した。

このうち、８年生では前半部分を担い、「社会を見つめる」「社会を見つめ直す」「社会を考える」といった各学習場面を設定した。これをもとに年間指導計画を作成した（表２）。

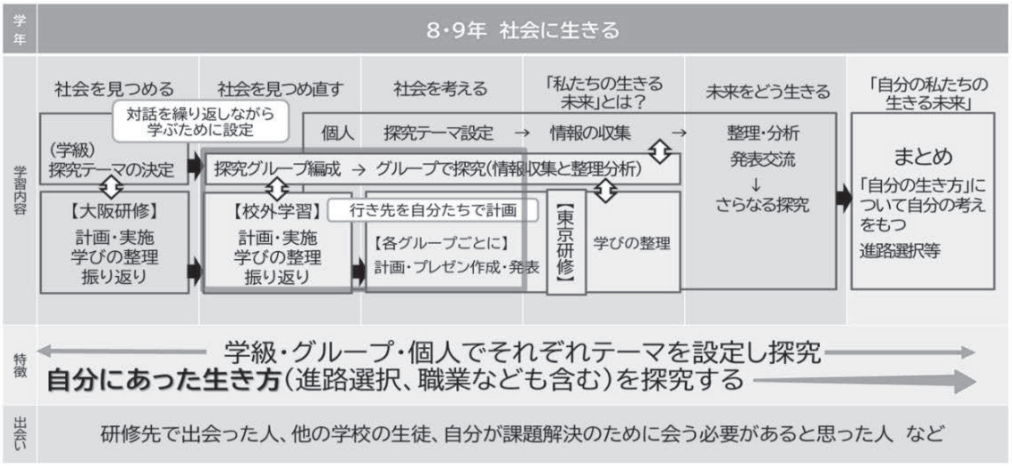


図２　８・９年生の学びのカテゴリー（探究領域）

表２　８年生における年間指導計画 －８年３組の例－

第８学年の目標	（１）問題解決力に関わって	実社会や実生活の中にある問題に対する問いを生み出し、その問いを解決するために何ができるか、様々な視点や立場から考え行動することができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、それぞれの願いや考えを踏まえた上で、他者と協働しながら納得解や最適解を導こうとすることができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	自分や社会を見つめ直し、社会に生きる人々に敬意をもちながら、自分にできることを考え、他者と共に社会のために行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	７年生までに、様々な問題と出会い、解決していく過程で、自分を取り巻く社会で生きる人々は、いろいろな見方や考え方をもって生きていることを理解しながら学んできた。自分の得意なことや苦手なことが認識できるようになり、自分の将来のことも考える時期である。これまで学んできたことを生かし、多様な価値観をもつ人が生きる社会で「自分はこれからどう生きていきたいのか？」を考え、自身の将来を見据える。その将来を考える中で、自分に必要なものや磨くべきこと等を模索し、判断し、それらを確立させるため行動する姿を具現させたい。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・真理の探究、創造・思いやり、感謝・礼儀・相互理解、寛容・社会参画、公共の精神・勤労・よりよい学校生活、集団生活の充実・郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度・国際理解、国際貢献・自然愛護・よりよく生きる喜び	
学びを構成する要素	社会　社会問題　国際問題　日本と諸外国の違い　自然環境　科学技術　SDGs　勤労　多様性　伝統文化　食文化　福祉　人間関係　地域社会　政治　働き方　テクノロジー	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	Ⅰ　「社会」を見つめる　（27時間）				主体的に情報を収集するプロジェクトを立ち上げ、実行する	Ⅱ　「社会」を見つめ直す（58時間）				Ⅲ　「社会」を考える　（20時間）		
主な学習活動	○前年度の「多様性」の学びを振り返り、自分が生きている身の回りにあるものを捉える。 ○大阪研修で研修したいこと、見てみたいもの、聞きたいことをもとに校外学習先を決める。 ○大阪研修の事前学習や準備をする。 ○大阪研修で体験活動や調査活動を行う。 ・東大阪モノづくり研修・大阪企業研修 ○大阪研修での学びを振り返る。		○問いをつくり、対話することを通して学級の探究テーマを設定する。 ○探究テーマの設定理由や、できるまでの過程をまとめる。 ○探究テーマについて、名大附属中と交流する。 ○身近な地域の問題について考える人や地域の魅力を発信するために活動している人に出会う。 ○探究テーマをもとに、夏休みの計画を立てる。			○夏休みに実施した個人探究をもとに、校外学習の計画を立てる。 ○小グループごとにアポイントを取り、校外学習の計画案を企業にプレゼンする。 ○学級の探究テーマをもとに話し合い、校外学習の校外学習先を決定する。 ○校外学習の準備をして、校外学習を実施する。 ○校外学習での学びを交流し、まとめる。 ○新たな視点をもとに、小グループで次の校外学習の計画を立てる。 ○小グループごとにアポイントを取り、校外学習の計画案を企業にプレゼンする。 ○学級の探究テーマをもとに話し合い、校外学習の校外学習先を決定する。 ○校外学習の準備をして、校外学習を実施する。 ○校外学習での学びを名大附属中と交流し、まとめる。 ※小グループでの活動を通して得た学びを探究テーマに還元できるように留意する。 ※段階的に校外学習の条件を変更する。 ※探究したい内容や分野に分かれたグループ編成を行う。				○東京研修の研修計画を小グループごとに計画する。 ○新たな問いをもとに研修計画、行程などをプレゼンにまとめる。 ○小グループごとに企業にアポイントを取り、校外学習の企画をプレゼンする。 ○研修計画や行程などを修正する。 ○東京研修の事前準備を行う。 ○探究を振り返り、名大附属中と交流するとともに自分の変容や成長をまとめる。 ○１年間の学びをまとめ、次年度の学びのイメージをもつ。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■これからどんなことを考え、みんなと学んでいくといいのか。 ●他の人の「社会」と自分の思い浮かべた「社会」は違うけど「社会」って何なんだろう。 ●幸せって何なのか？どうしたら幸せになれるのか。何を幸せと言うのか。 ●どうして「働く」のか。お金のため？本当にそれだけなのか？ ●どうしたら自分の「社会」を知ることができるだろう。「社会」に対してできることは何かあるのか？ ●変化していく社会の中で、どう生きていけばよいのか？ 【希望と勇気、克己と強い意志・思いやり、感謝・相互理解、寛容・社会参画、公共の精神・勤労・国際理解、国際貢献　など　】					■探究テーマに迫れるような企業がどこか分からない。どんな問いがあれば探究テーマに迫れるのか分からない。 ●私一人は企業Aを推すが、他のメンバーはみんな企業Bを推している。でも企業Bの良さも確かに分かる。グループとしてどちらを推すべきか。 ■私たちのグループが提案した企業は選ばれなかった。 ●１回目のテクノロジーの観点とつながるグローバルの観点を２回目は体験したいけど…みんなと違うな。 ●テクノロジーはこれから当然進歩していくのだろうけれど、それに伴って自然環境は破壊されるかもしれない。どうしたらいいのだろう？ ●社会のために何かしたいけど、できることは？ 【向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・思いやり、感謝・礼儀・相互理解、寛容・遵法精神、公徳心・社会参画、公共の精神・勤労・よりよい学校生活、集団生活の充実・郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度・自然愛護・よりよく生きる喜びなど　】				■みんなが行きたいところは一致しているけれど、探究している内容には違う企業の方が合っている。 ●都会での考え方を岐阜で真似するだけでは発展しなさそうだな。どうしたら？ ●岐阜もだんだんと東京のように都市化が進んでいるが、今ある自然環境も大事にするためにはどうしたらよいだろう？ ●東京の社会で過ごしてみたいけれど、岐阜にも愛着がある。どちらで過ごそう？ ●東京も昔は自然環境がたくさんあったはず。東京で自然を大事にしてきた人はどんな気持ちで近代化を見てきたのだろう？ 【向上心、個性の伸長・礼儀・相互理解、寛容・遵法精神、公徳心・社会参画、公共の精神・よりよい学校生活、集団生活の充実・よりよく生きる喜び　など　】		
人材活用施設	（東大阪モノづくり校外学習先） ・㈱盛光SCM　・ノースヒルズ溶接工業㈱　・三島硝子建材㈱　・㈱富士製作所　・フセハツ工業㈱　・野田金属工業㈱　・（有）アートステージ　・川村鋼鉄㈱ ・㈱MACHICOCO　・協立化工業㈱　・ワショウ金属工芸　・（一社）河内木綿はたおり工房 （大阪企業校外学習先） ・万博記念公園レガシーツアー　・パナソニックスタジアム吹田　・パナソニックミュージアム　・おおさかATCグリーンエコプラザ　・海遊館　・NHK大阪放送局　・大阪府庁　・ナレッジキャピタルグランフロント大阪　・天王寺動物園　・あべのハルカス　・甲子園球場 ・江崎グリコ記念館　・カップヌードルミュージアム　・梅田スカイビル					・ぎふコーラ・長良川漁協 ・夏休みに調べてきた企業など				・他のテーマを探究している仲間 ・単元Ⅱで出会った人や企業 ・地元を離れて他県で過ごしている人		
教科等との関連	・国語：聞き上手になろう～質問で思いや考えを引き出す～ ・社会：日本の地域的特徴と地域区分（人口、産業、交通、通信） ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査 ・理科：自然環境、生態系　　・家庭科：食品に関わること					・国語：立場を尊重して話し合おう～討論で多角的に検討する～　・社会：日本の諸地域 ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査 ・理科：自然環境、生態系　・音楽：日本の伝統芸能 ・家庭科：食品に関わること　　・技術：プログラミング　　・外国語：国際理解				・国語：国語の学びを振り返ろう　～テーマを決めて話し合い、壁新聞をつくる～ ・社会：開国と近代日本の歩み（産業革命と資本主義） ・理科：自然環境、生態系　　・家庭科：食品に関わること ・技術：プログラミング　　・外国語：国際理解		

3. ８年１組におけるカリキュラム開発の具体

3.1　学びの展開

８年１組では、「大阪には何があるか」という視点をもって、大阪研修に出かけ、町工場で働く人との出会いや様々な施設での体験活動から「幸せとは？～私たちは幸せになれるのか～」という探究テーマを作り出した。

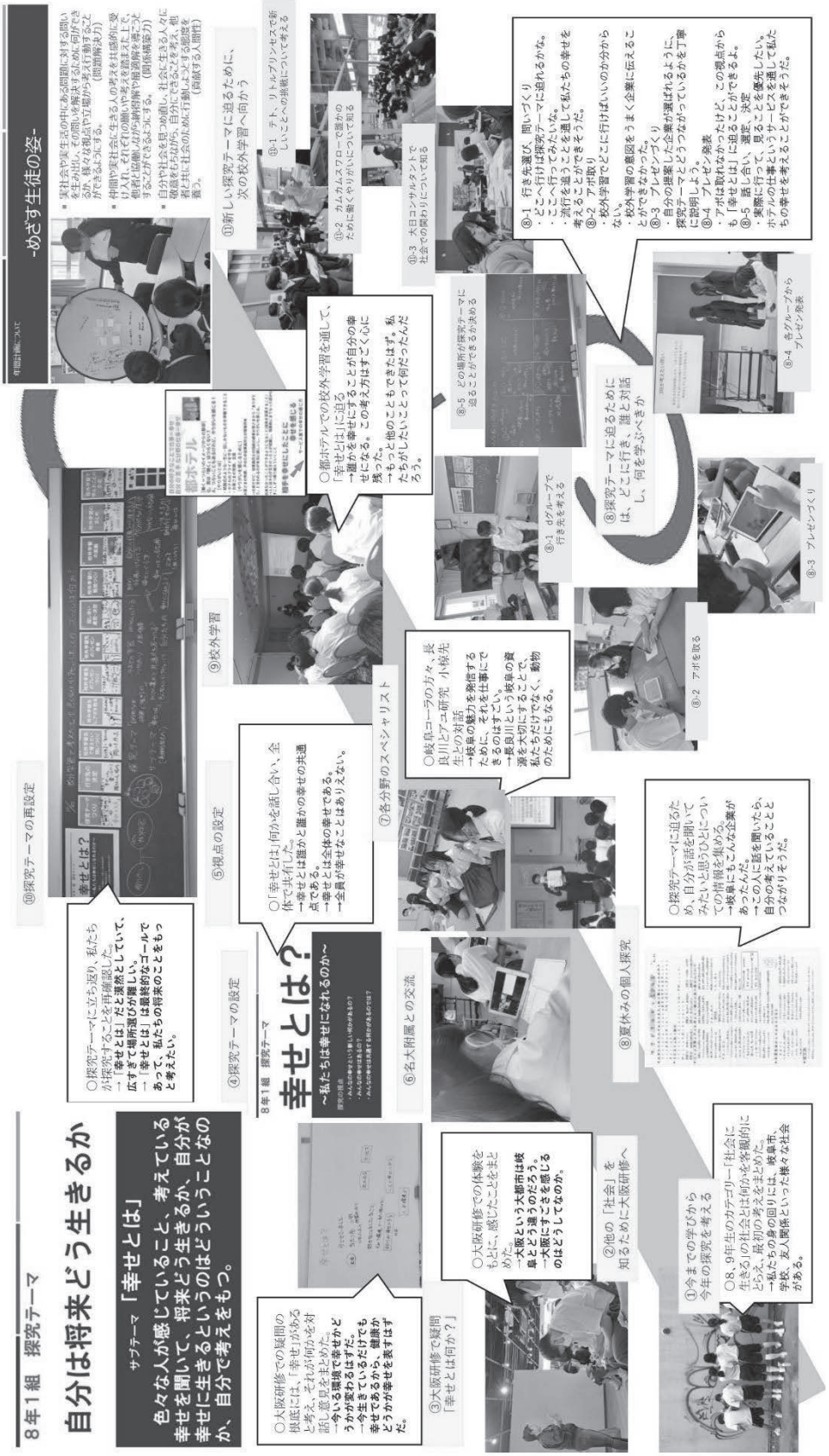


図３　８年１組における生徒の学びの展開

図３は、８年１組における生徒の学びの展開を表したものである。「幸せとは何か」を仲間と対話するなかで、本当の幸せとは何かを深く考えたり、実社会にも目を向けるために、地域の特産品の開発に副業で取り組む人や長良川の自然環境に取り組む人とも幸せとは何かを対話したりした。もっと幸せについて様々な視点から考え、仲間と問いを創り出し、幸せとはどういうことなのか考え続けた。さらにグループで校外学習を企画し、どんな人や社会にどのような問いをもって話をしたいかを協働的に考え、選択することで「どうすれば幸せに生きることになるのか」を見出そうとした。

本時については、図３の⑪に関する学びとなる。問題解決力の育成を企図し、各グループの問いと校外学習計画には、どんな価値があるかを話し合うことを通して、学級の探究テーマ「私たちは幸せになれるのか」との関連をもとに、どの価値から探究テーマに迫るとよいか考える場を設定した（図４）。

（１）目標
各グループの問いと校外学習計画には、どんな価値があるか話し合うことを通して、学級の探究テーマ「私たちは幸せになれるのか」との関連をもとに、どの価値から探究テーマに迫るとよいか考えることができる。（問題解決力）

（２）道徳的価値判断に関わって
各グループの問いと校外学習計画にある価値についての理解を深めた上で、どの問いと校外学習計画が、学級や自らの探究における新たな見方や考え方の発見、創造につながり、自分の生き方を豊かにするものかについて考え、議論する。（真理の探究、創造）

本時（27/58）

活動内容（○教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	○教師の手立てと見届け
１　前時のプレゼン発表を振り返り、本時の見通しをもつ ○プレゼン発表をして各グループの意見を聞いたけど、今日は何をしたいですか。 ・どのグループの問いも校外学習先もいいと思うから、どうやって決めればいいか分からない。 各グループの問いと校外学習計画には、どんな価値があるか。	○各グループのプレゼンと問いを振り返りながら、生徒の思いを聞き、本時の見通しがもてるようにする。
２　全体で各グループへ質問する ○各グループの問いと校外学習計画について質問や意見はありませんか。	○それぞれの問いや校外学習計画について整理し、共通理解ができるようにするために、生徒の考えたことや質問が書かれたワークシートをもとに話す準備をする場を位置付ける。

グループＡ 郷土の伝統・文化 「昔ながらとこれからをどう両立するか」	グループＢ　節度・節制 「便利であることは本当に幸せなのか」	グループＣ 社会参画・公共の精神 「どうしてボランティアをするのか」	グループＤ　勤労 「幸せを生み出すのは効率化か手作業か」
今までに身近な社会への貢献を通して、みんなの幸せを生み出している人に出会った。昔からあるものを大切にしている人もいれば、新しいものを生み出した人もいて、両立は難しいことだと思ったから、考えていきたい。	これからも技術が発達し、私たちの生活は豊かになる一方で、失われていくものもたくさんある。だからテクノロジーとの関わりを考えていくことが幸せを考えることにつながると思う。	私たちの手でよりよい社会を作っていくには、人任せにしていてはいけないけれど、とても難しいことだと思う。だから、私たちがどう社会に関わるかを考えることは、幸せにつながると思う。	働くことは大切だと思う。将来の私たちにとって必要だと思う。効率化と手作業、どちらの良さも分かるけれど、それぞれの立場で働く人と出会い、幸せについて考えていきたい。

○各グループの問いと価値の組み合わせについて対話できるように、子供の発言を丁寧に聞き取り、板書に位置付ける。

○次の時間の決定に向けて、対話によって生み出された組み合わせを整理し、次時につなげる。

３　問いと価値の組み合わせについて話し合う
○どんな組み合わせが考えられますか。

私たちの幸せについて考えていくなら、日々進化していくテクノロジーについて考えた方がいいと思う。でも、これには問題点もあると思うから、Ｄの視点も入れていきたい。	ＣとＤの問いは似ていると思う。ボランティアの人とお金のために働く人のどちらの人の話も聞いて探究テーマについて考えていきたい。どちらにも話を聞いて、私たちがやる活動を決めたい。

４　振り返りを記入する
・私たちの問いはＢの校外学習先へ行くことで、さらに考えることができる。だからＤの校外学習先にも行って私たちの問いについて聞いてみたいし、話してみたい。
・私もＣとＤの問いは似ていると思う。だけどボランティアと働くことは違うと思うから、どちらの人にも話を聞くことで、比較して学級の探究テーマに迫っていきたい。

目標に迫った姿をどのように見届けるか
各グループの問いや校外学習計画にある価値と、学級の探究テーマとの関連をもとに、どの価値から学級の探究テーマに迫るとよいか考えている。（問題解決力）

・対話での発言の様子や振り返りシートの記述から見届ける。

図４　８年１組 学習指導案（本時）

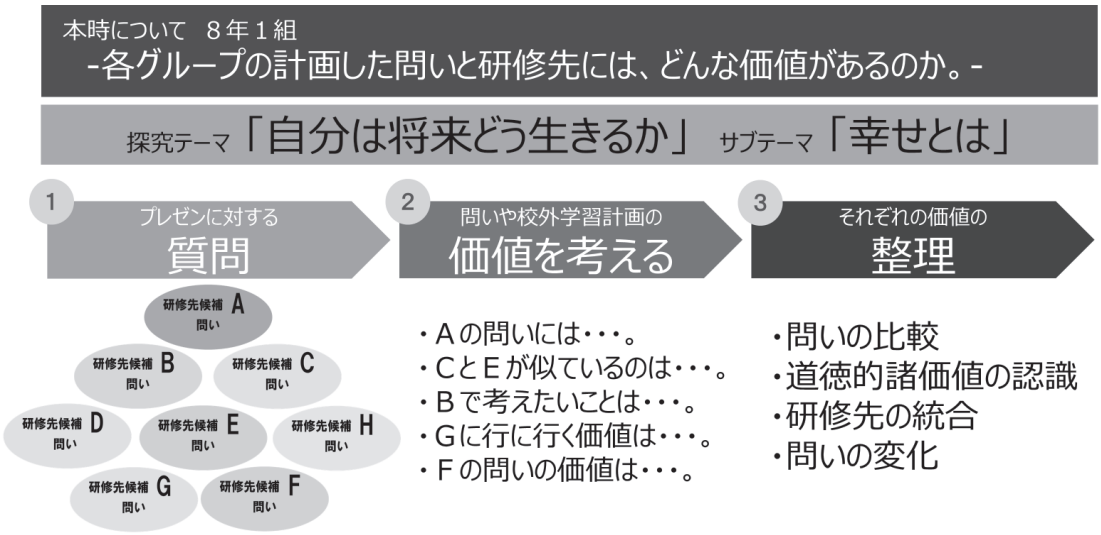


図５　８年１組 実践概念図（本時）

3.2 実践（本時）に関する省察

本時の目標は、グループごとに選んだ校外学習先に対して、そこへ行く意味や価値について考えることであった。生徒は幸せに生きることを考えたいという願いをもとに探究テーマ「自分は将来どう生きるか」に変え、どの校外学習先へ行くことで自分の問いや探究テーマに迫れるかを考えている。本時では、それぞれの校外学習先に行き話を聞くことで、何を考えることができるのか、そこへ行くことにどんな意味や価値があるのかを考え、議論することをねらった。

本時に生徒は、「伝統とどう関わっていくかを考えたい」と問いを明確にし、校外学習へ行く意味や価値について道徳的諸価値も交えて語る姿があった。このグループの生徒は、大日コンサルタントへ行き鵜飼大橋の建設を通して伝統と今をどう共存させるか、と伝統や郷土である岐阜についても言及した。以前は、校外学習が決まらず何もできなかったが、問いをつくることの重要さに気付くことで、価値にまで迫ることができるようになった。

しかし、本時には自分のグループで考えた問いと校外学習先の価値と他のグループの考えを問いと校外学習先とを比較して、共通点や関連を考えたり、発言したりする姿は見られなかった。どうして行きたいと思ったのか、どんな意味があるか伝わるように、その価値が共有されるような手立てを工夫すべきであった。そうすることで自分が提案した校外学習でなくとも自分のグループの問いで考えることができるなどと教材との関係構築を図ることができたと考える。また、教師が生徒の発言の意図や思いを汲み上げ、問い返しを重ねることで生徒の考えていることの深層を捉えることを大切にしたい。

４．８年３組におけるカリキュラム開発の具体

4.1　学びの展開

８年３組では、「自分はどんな関わりの中で生きているか」の視点をもって大阪研修へ赴き、様々な体験活動を行う中で社会に生きる人々と出会い、「変化していく社会の中で自分はどう生きるか」という学級の探究テーマを設定した。図６は、８年３組における生徒の学びの展開を表したものである。テーマを設定する過程で「社会とは何か」を仲間と対話し、自分を取り巻く社会にアプローチできる多様な視点に気付くことができた。どのような視点からどんな問いをもち、どんな研修先を選択すれば、自分が生きていく社会を捉えることができるのかを協働的に考え、自分の生きる「社会」と、その社会でどう生きるかを見いだそうとした。

本時については、図３の⑧から⑨に関わる学びとなる。問題解決力の育成を企図し、学級の探究テーマ「変化していく社会の中で自分はどう生きるか？」に迫るための校外学習先を２つ選定することを通して、その校外学習先に行くまでの時間や距離など現実的な条件を考慮した上で、最も学級の探究テーマに迫ることのできる問いと活動を見いだし、全員が納得できる校外学習先を選定する場を設定した。その際には、各校外学習先に備わる道徳的諸価値に着目した議論を展開させた。図８は本時における板書構造であるが、「自然環境」「環境問題」「科学技術」といったよりよい社会の創造や自身の生き方に関わる道徳的諸価値を板書している。議論では、道徳的諸価値を前面に立てながらそれらを比較し、ジレンマを浮き彫りにする中で協働的な検討を重ね、納得解を導いた。すなわち、単に目的地を選定するのではなく、生徒自身および学級において重視したい社会や生き方に関わる道徳的諸価値を納得解として導出し、それに付随する結果として目的地が選定されたと理解することが可能である。こうした本時のカリキュラム開発は、探究的な学びの過程にジレンマや道徳的諸価値を織り込み、「どう生きるか」の学びを深めた萌芽的な好例として指摘できよう。

4.2 実践（本時）に関する省察

本時の目標は、「学級の探究テーマ「変化していく社会の中で自分はどう生きるか？」に迫るための校外学習先を２つ選定することを通して、探究テーマに迫れるように校外学習先を選ぶことは自分の生き方にどう繋がるのかに気付き、決定までの過程を振り返ったとき自分の考えの変容を俯瞰的に捉えることができる。」であった。生徒はまず３つまで絞られた提案が探究テーマに迫るために必要な場所なのかを考えた。「自分の生活に直結する自然を守るためには自然を知るべき」「自然破壊が昔に比べて増加傾向にある現状を打開

図６　８年３組における生徒の学びの展開

（１）目標

学級の探究テーマ「変化していく社会の中で自分はどう生きるか？」に迫るための校外学習先を２つ選定することを通して、その校外学習先に行くまでの時間や距離など現実的な条件を考慮した上で、最も学級の探究テーマに迫ることのできる問いと活動を見いだし、みんなが納得できる校外学習先を選定することができる。（問題解決力）

（２）道徳的価値判断に関わって

各グループの問いと校外学習計画にある価値を踏まえた上で、どの問いと校外学習計画が、学級や自らの探究において新たな見方や考え方の発見、創造につながり、自分の生き方を豊かにするものか考えて議論し、選択・判断する。（真理の探究、創造）

本時（27/58）

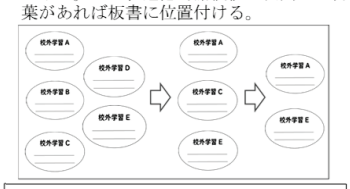
活動内容（○教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	○教師の手立てと見届け
１　前時の活動を振り返る ○プレゼン発表後の対話を終えて、みんなで考えたことは何だったかな。 ・前回は、３組の問いを自然環境から捉えるか、それともテクノロジーか文化か世界かで意見が対立した。 ・それぞれに良さがあり、どこに行っても問いに迫ることはできるはず。でも現実、行けるのは２つ、時間や移動手段なども考えていく必要があるな。 探究テーマ「変化していく社会の中で自分はどう生きるか？」に迫るには、どの問いをもって、どこへ校外学習に行き、何を見て考えてくるとよいか？ **２　課題について学級全体で対話する** 校外学習先Ａ：自然環境の視点から社会を捉えることができる。今日までどのように長良川を守ってきたか、これからどう守っていくか。 校外学習先Ｂ：岐阜の伝統文化である薬草をこれからも大切にしていこうとする視点で社会を捉えることができる。 校外学習先Ｃ：時代の流行を捉えて会社を運営してきている。変化していく社会の中で生き残っていく術を学ぶことができる。 校外学習先Ｄ：岐阜市民のことや未来を考えて運営している。身近な地域がどんな思いで前に進んでいるのか学ぶことができる。 校外学習先Ｅ：今の食料自給率を見ると日本にあるものだけでは生きていけない社会になっている。世界との繋がりを学ぶことができる。 ・前回の校外学習ではテクノロジーについての問いを考えることができた。その対にある自然環境の観点からじっくり考えたい。 ・校外学習先Ｄで話を聞くのは身近な社会のことについて考えることが目的だけれど、去年に柳ケ瀬で探究活動をしてきたから、それよりも校外学習先Ｅで活動してグローバルな視点を取り入れる方が、問いに迫るための視野が広がりそうだな。 ・ぎふコーラの人の思いも以前直接聞かせてもらえたので、今回の校外学習では今までと違う視点が入るといいな。 ・校外学習先Ａに行くなら、実際の川も直接見てみたいよね。帰り際にちらっと川の様子見に行けないかな？ ○本当にそれは、その校外学習先でないと学べないことなのか。 ○どのような組み合わせが選択肢としてあるか。 校外学習先Ａ＋α：●体験を通して環境保護の視点を得られる。●帰り道に実際に川を見てみるといいな。▲移動に時間がかかりそう。 校外学習先Ｃ：●実際に「変化していく社会」の中を生き抜いてきた会社だからこその考え方が得られる。▲前回の校外学習先と内容が少し被る。 校外学習先Ｅ：●他の校外学習先には無い、グローバルな視点を得られるのはここだけだろう。●外国の方から見た社会を聞いてみたい。 ・校外学習先Ｃからはテクノロジーの面で、校外学習先Ｅからは物流という面で、それぞれ「変化していく社会」を捉えて生き抜いてきた企業だよね。あとはどちらの面で私たちが学びたいか、が重要ではないか？ ・校外学習先Ｃよりも、この問いがあれば新たな視点を得られる校外学習先Ｅの方が僕らの視野が広がるよ。 校外学習先Ａ＋α：身近にあるけれど関心なかった自然環境の視点を得て、前回に学んだテクノロジーの視点と関連付けて考えられるようにしよう。 校外学習先Ｅ：「世界から見た日本の社会」という新たな視点を得て、今後どう世界とつながり、どう世界と関わっていくのかを考えられるようにしよう。 **３　３組が行く校外学習先を話し合いで決定し、全員で確認する** ○校外学習先は（　）と（　）に行くことに決定でよいですか。 **４　校外学習先の決定までの流れを振り返る** ○校外学習先を決めるまでを振り返ってみてどうだったか。 ・前回の校外学習先を決める時と比べて、「二つ選ぶ」というのは幅が広がったように見えたけど、午後の校外学習先に間に合うかどうかという時間的制約があると選ぶのがとても難しかった。でも今回決まった校外学習先ＡとＢでは「変化していく社会」を間近で見て体感してきている方々と出会えるから○○について質問してみたい。 ・対話をしている時には発表できなかったけれど、校外学習先Ａに行くためにはやはり結構な時間がかかるし、大分急いで動かないと午後の校外学習先Ｂには間に合わない。でもやはり、そうまでしても行く理由が校外学習先Ａにはあると思って、自分の身近にあった自然環境なのに全然気付かずこれまで生活してきたけれど、実際は色んな人の思いで守られてきてこれからも守っていこうとする思いがあることに気付ければ、自分の中の社会が広がるし、その社会の中でどう自分は自然環境と関わっていくかを考えられる。だからぜひ校外学習先Ａはいいなと思っています。 ・前回も今回も自分が提案した校外学習先は選ばれなかったけれど、すべてがうまくいくわけではないことがよく分かった。問いに迫ることを自分たちで考えて、準備して、選んで、という過程が楽しかったし、自分で道を切り開いていくことの必要さを感じたからまたやりたい。	○提案された各校外学習先と、どのような問いで探究テーマに迫ることができるか再度確認した上で「今回の校外学習先を選ぶ際の条件は何だったか」と問い、複数の提案から校外学習先を絞っていく視点を思い出し、切実感をもって本時に臨めるようにする。 ○Ｄ（どう生きるか）リーダーが会を進行できるよう、流れを事前に確認しておく。 ○学級の中で今どこまで校外学習先を絞れているのか、今どんなことで困ったり悩んだりしているのかを問う。 ○学級全体の思考の流れが掴めるよう、構造的な板書でそれぞれの考えや意見を位置づける。また、道徳的諸価値を表出した言葉があれば板書に位置付ける。  **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 限られた条件の中で、どの問いで探究テーマに迫ることが学級として有益かを考え、みんなが納得するような校外学習先を選定している。（問題解決力） ・グループ内での発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

図７　８年３組 学習指導案（本時）

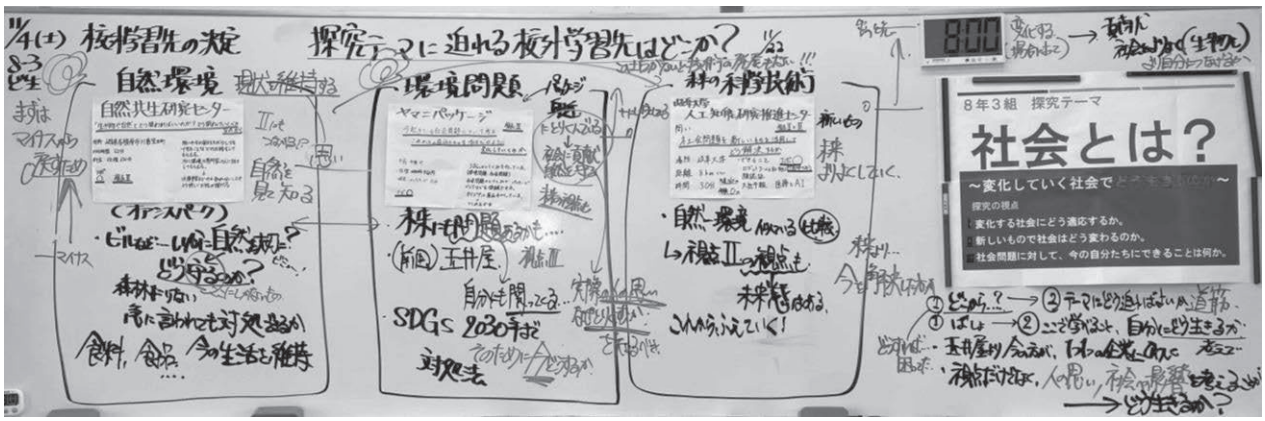


図８　８年３組の実践（本時）における板書構造

するため考えるべき」「科学技術はこれから更に発展し、自分の生活に直結してくるため学ぶべき」との答えを見いだした。

提案された場所と探究テーマとの繋がりは明らかになったものの、３つともに価値があると感じているからこそ２つに絞ることは難航した。「どうやって２つに絞る？」と生徒に問うたとき、「２つの場所自体に繋がりがあった方がいい。僕はこれがいいって思うけれど、みんなにも聞いてみたい。」との声が上がり、近くの生徒で対話する時間を設けることとした。そこで対話したことで個人の考えが表出され、「自然と環境は密に繋がり、自然が守られていないと科学技術は発展しない」との理由から、人工河川を用いて環境保全研究に取り組む自然共生研究センターと環境問題に会社をあげて取り組むヤマニパッケージに行くことに決定した。

決定後は「１回目の行き先を決めた時の自分と、今（２回目）の行き先を決めた時の自分とを比べる」視

点を与えた上で決定までの過程を振り返った。「問題の解決に向かうための道筋が分かってきた」と話す生徒や「校外学習等で学ぶことが自分自身にどう生きてくるのか？という視点で考えることができた」と探究テーマに迫ることを通して自分の生き方を考えようとしている生徒がみられた。今後も探究の過程において生徒がどのように考え、どのように問題を解決してきたのかをメタ認知できるように指導していきたい。

5. ８年生のカリキュラム開発に関する省察

８年生のカリキュラム開発の成果として、次の三つを指摘できる。まず一つは、「問題解決力」との関連において、探究テーマ（サブテーマ・探究の視点）を生徒と創り上げることで、どのように探究していくかを生徒と共有できたことである。これについては、校外学習を自分たちで選定する場面では、探究テーマにどのように迫るか、どの探究の視点から考えているのか、どんな価値があるのかを考える姿があった。また、探究テーマに迫っていることを生徒が自覚できるように、探究のサイクル全体を振り返る「まとめ」を実施した。自分たちの探究のよかったところ、課題を把握する姿があった。

二つは、「関係構築力」との関連において、生徒が「探究テーマ」と自分の興味や関心を関連づけて、学ぶ意味や意義をつくりだすことができたことである。校外学習先に電話をかけてアポイントメントを取ったり、仲間に校外学習先をプレゼン発表する場面では、教材との出会いや関係、学ぶ意味や意義を生徒が「探究テーマ」をもとにつくる姿があった。また、校外学習では、事前に考えた質問をもとに対話やインタビュー活動を行い、相手の思いや願いを共感的に聞いたり、相手の立場に立って考える姿があった。

三つは、「貢献する人間性」との関連において、生徒が探究の中で内省する場面を意図的に位置づけることができた。「幸せとは何か」「働くとは何か」「社会とは何か」を対話する活動を、単元の入り口と出口で実施した。その中で、８年生になったころの自分と、今の自分（８か月後）を比較しながら内省して、どのような変容があったか、どうして変わったのかポートフォリオなどを参考に深く考える姿があった。

一方、課題としては、次の二つが挙げられる。一つは、実社会・実生活の中にあるジレンマやエラーを生徒が実感し、納得解や最適解を導く過程の充実である。生徒が感じている、もしくは思い悩んでいることを丁寧に見取り、学級のみんなで考える機会を設けたり、専門家などに話を聞く機会を柔軟に作ったりしたい。そのためには、時間数の確保や予定調整などがタイムリーに行えないなどの問題もある。ICTの活用はもちろんであるが、実際に現地に赴き、対面で会話をする経験も大切である。双方のよさを生かしながら、ジレンマやエラーと向き合う時間を大切にしていきたい。

二つは、児童生徒の探究に対する教師の支援の在り方の工夫である。教科とは違う支援の在り方が必要で、教師の探究をガイドする手立てを更に工夫する必要がある。具体的には、生徒の考えたいこと、伝えたいことを教師が聞き分けたり、整理したりすることである。また、生徒の発言や記述を道徳的諸価値などの視点から見取り、個の成長を価値付けるなどの手立てを工夫していくことが必要である。

6. おわりに

本稿では、岐阜大学教育学部附属小中学校において開発を進める新領域「どう生きるか」のカリキュラム開発について、８年生「社会に生きる」を事例に開発の具体的かつ実践的状況を提示し、成果と今後の課題を明らかにした。

成果としては、教育課程やカリキュラム開発の枠組み（全体構想）との関連において、カリキュラム開発が進展したことである。とりわけ、全体構想にて提示された自己実現に向かう資質・能力である、問題解決力、関係構築力、貢献する人間性について、単に教師が学びを誘導し資質・能力の育成を図るのではなく、生徒が自覚的に自身の探究的な学びの過程に取り込み、探究を展開できるようカリキュラム構成に留意した。

例えば、探究テーマの設定においては、教師による提示に留まるのではなく、生徒による議論の場を設けてテーマを探究する意味や意義を問い、創造的に練り上げた。また、生徒が探究の中で内省する場面を意図的に位置づけ、「幸せとは何か」「働くとは何か」「社会とは何か」について対話する活動を取り入れた。これらのカリキュラム開発は、生徒による主体的・協働的な探究を促し、資質・能力の育成に寄与した。探究を中核とした「社会に生きる」におけるカリキュラム開発の基軸が可視化されたと言えよう。

他方、課題としては、基軸とする探究に、いかにエラーやジレンマ、道徳的諸価値を織り込み、「どう生きるか」の学びの深化を図るカリキュラムを創造するかである。エラーやジレンマの実感については、まずは生徒のいまここを丁寧に見取るとともに、学級での思考や専門家などに話を聞く機会の設定が考えられる。加えて、道徳的諸価値については、本稿の考察を通じて、探究や議論しようとする内容に備わる道徳的諸価値に着目し、それらを立てて議論の俎上に載せるカリキュラム方略の有効性が萌芽的に示された。この方略により探究に潜在するジレンマが浮き彫りになり、道徳的諸価値を介して協働的な検討を重ね、自己の生き方や社会の在り方を考えるとともに、探究の学びの進展が可能になった。本事例における好例を足場として、各学年においても発達の段階に応じてカリキュラム開発の深化が期待される。

参考文献

岐阜大学教育学部附属小中学校（2020）令和２年度研究開発計画書
岐阜大学教育学部附属小中学校（2022）令和３年度研究開発報告書
岐阜大学教育学部附属小中学校（2022）令和４年度研究紀要
岐阜大学教育学部附属小中学校（2023）令和５年度研究紀要